資料
『リグヴェーダ』アパーム・ナパート「水たちの孫」讃歌

後　藤　敏　文

水と火の神話ー「水中の火」
篠田知和基・編
楽瑯書院
2010　(3月19日)

資料
『リグヴェーダ』アパーム・ナパート「水たちの孫」讃歌

後藤 敏文

古代インドの讃歌集『リグヴェーダ』(紀元前 1200 年頃編集)［RV］には，アパーム・ナパート(Apāṃ Napāt) に捧げられる讃歌が事実上二篇存在する。*apā́m* は「水」を意味する女性名詞の複数所有格形で，「水」*áp-* は若い娘たちの姿で表象される。*nápāt-* はラテン語 *nepōs* (語幹 *nepōt-*)「孫，子孫」，後に「甥」，リトアニア語 *nepuotis*「孫，甥」，古英語 *nefa*「孫，甥」; 女性形ラテン語 *neptis*「孫娘」，後に「姪」，古アイルランド語 *necht* (ラテン語 *neptis* に対応)，古高ドイツ語 *nift, nifta*「姪」，さらに，ギリシャ語 *anepsiós*「従兄弟」，セルビア教会語 *netьji*「甥」などとともに，インド・ヨーロッパ祖語 **népōt-* (所有格は **n*$_e$*pt-ṓm*) に遡る。原義は「孫」にあると思われ，古インドアーリヤ語 (ヴェーダ語，サンスクリット語) の *nápāt-* も「孫」を意味すると考えるのが自然である。「息子，child，son」などと翻訳されることがあるようであるが，それらに当たる語は別にあり，社会制度，家族制度が厳密であった印欧語諸部族，インドアーリヤの諸部族がこれらの語彙を曖昧に使用していたとは思われない。「孫」を意味する語が，状況によって直接の息子，娘以外の子供たち一般を謂うときに使われた可能性は否定できないが，語そのものの意味とは別次元のことである。イランで

は，新アヴェスタ語に見られる *apąm napāt-*（または親族名称の影響を受けた *naptar-*）が *apā́m nápāt-* に当たる。

「水たちの孫」アパーム・ナパートが火の一側面をさすことは明瞭に述べられている。火はインドでは *ágni-* という男性名詞で，同時に火神である。ラテン語 *ignis*（インニスと発音する），古教会スラヴ語 *ognь*（オグニ）などと同起源である。イランではこの語は一般には使用されず，別の語が用いられた（古アヴェスタ語，新アヴェスタ語 *ātar-*）。「水の中の火」によって何が意図されているかについては，多くの見解や研究が提出されてきた。Ellison Banks FINDLY "The 'Child of the waters': A Revaluation of Vedic Apāṃ Napāt", Numen 26 (Leiden 1979) 164–184 は研究史について，信頼できる簡潔な概観を与え，かつ，ヴェーダ祭式に於ける当該リグヴェーダ讃歌の使用法を検討して，彼自身の解釈の方向を提示している。雲の中の火，即ち電光を想定する説は明確に否定され，水と混合されるソーマが持つ火の性質を強調している。デュメズィル (Georges DUMÉZIL) によるインド・イラン，ローマ，古アイルランドの神話の比較と，それに基づく元の神話を辿る論考（"Le puits de Nechtan", Mythe et épopée III, 1973 など），および，その受容・紹介についても要領よくまとめられている。

FINDLY のリグヴェーダ讃歌の解釈は穏健妥当な領域にまとめられているが，祭式文献に見られる記述については，やや，理解の足りない点が見られる。ソーマ祭には「アパームナパートに関すること」Aponaptrīya（「アパームナパートの［讃歌］」が原義）と呼ばれる儀礼があり，『リグヴェーダ』を護持してきたホートリ祭官（ホータル，Hotar/Hotṛ「献供者」，実際の祭式ではリグヴェーダの讃歌を唱える役割を負う）の職掌に属するため，同祭官学派のアイタレーヤ・ブラーフマナ II 19–20（さらに，II 16），カウシータキ・ブラーフマナ XII 1（さらに，XI 4）に記述が見られる。アドゥヴァリュ祭官（「道を辿る」祭官，実務を担当する）の学派に属する，より古い「ヤジュルヴェーダ」のマイトラーヤニー・サンヒター，タイッティリーヤサンヒター，シャタパタブラーフマナにも，ホータルがアドゥヴァリ

ュに指示する文句が収録され，短い言及が見られる。これら，ヴェーダ散文文献の訳と解説を準備したが，発表にまで仕上げられなかったため，ここでは，リグヴェーダの二讃歌の紹介に留める。注釈も最低限に留めざるをえない。別に論考を添えて発表を期したい。結論だけ先取りして述べておく：散文祭式文献に見られる記述とリグヴェーダが予定する儀礼との間には本質的差異は見出されない。アパーム・ナパートの儀礼は，朝，アドゥヴァリュ祭官が川に水を汲みに行き，川の水にバターオイルを献供してから容器に汲み上げ，祭場に持ち帰る儀礼を中心に組み立てられる。この容器は陶製の水差しで *ekadhana-*「(唯) 一の財」とよばれ，中の水を女性形で *ekadhanā-*（「(唯) 一の財を中に持つ［水］」）とよぶ。おそらく，水の名称が先にあり，容器の名称はこの語から逆に作られたものであろう。アドゥヴァリュ祭官が帰ってくる姿を目にした時点を捕らえて，ホータル祭官は同祭官に呼びかけ，リグヴェーダの讃歌（以下の二篇ほかから採られる）を唱えかける。汲まれた水（若水）は前日汲まれて「一夜を過ごした」水（*vasatīvarī-*）と合わせられる。儀礼については，さらに，WEBER Ind.St. IX (1865) 224, EGGELING on ŚB III 9,3,14 (1885, SBE 26 232), CALAND–HENRY L'Agniṣṭoma (1906) 139, HILLEBRANDT Rituallitteratur (1897) 129, OLDENBERG Prolegomena (1888) 354 参照。

アパーム・ナパートをめぐる観念の中心は，日の出の太陽光を含んだ朝の若水を汲み，これを太陽光と同一視される祭場に燃える火神アグニの中に吹き込む，ということにあるように思われる。このことを十全に論証する為には，ソーマ祭の本来の意義と挙行時期または動機の解明が必要になる。FINDLY は DUMÉZIL に倣い，王権の象徴たる光輪フヴァルナフ X^{v}arnah（Farnah）を中に蔵する神聖な湖ヴォウルカシャ Vo^{u}rukaṣa と，それを資格のない者が奪おうとすることによって引き起こされる災害（氾濫と河川の誕生）という神話を原初形に近いものと考え，インドのそれを祭式的展開による派生形と捉えているようであるが，今後の検討が待たれる。リグヴェーダやヴェーダ祭式に親しんだ研究者には，沈んだ太陽の「太陽光」の

（「広い切れ込み［入り江，または河口］をもつ［湖］」）

行方を巡る思弁に本来の姿があるように思われる。

リグヴェーダ **II 35** (226) アパーム・ナパート Apāṃ Napāt「水たちの孫」M. Witzel–T. Gotō 他 Der Rig-Veda. Das heilige Wissen. Erster und Zweiter Liederkreis. Frankfurt am Main (Verlag der Weltreligionen) 2007, 409–414, 813–816 に Gotō によるドイツ訳および解説がある。辻直四郎訳は岩波文庫『リグ・ヴェーダ讃歌』(1970) 73－76。[ ] は補いを，( ) は説明を意図する。複数形には日本語として不自然な場合にも「たち」を付した。

1. 勝利の賞をめざして，私は（今まさに）彼に向けてことばの使用を解き放った。
私の歓迎の歌たちを，川から生まれた［彼］は，気に入ってほしい。
水たちの孫は速い者たちを駆りたてる者である。そうだろう？彼は。
［彼は］［歓迎の歌たちを］よく飾られたものとなすがよい。彼は好むだろうから（ﾏﾀﾊ: 彼は好むがよい）。

2. この良く仕上げられた詩句（マントラ）を，彼に，心臓から，
我々は語りたい。それを彼は知ることになる，そうだろう？
アパーム・ナパートは，アスラの性（さが）の偉大さ（権力）により，
あらゆる［地上の］諸存在を，主人（部族の成員）として生み出した。

3. 集まり行く［川たち］があれば，加わり行く［川たち］がある。
共通の容器（海）を川たちは満たす。
他方，その清らかな，光を放っている
アパーム・ナパートを，清らかな水たちは，囲んで位置している。

4. 若い女たち，［すなわち］水たちは，微笑まずに，その若者を
幾度も拭いながら，巡って進む。
彼は，白く輝く巧みな［焔たち］を伴って，裕福に，我々のもとで，
光を放っている，焚き木無しに，バターオイルを晴れ着に，水たちの中で。

5. ここにいる揺るぎない彼のために，三人の女たちは

食物を定め置こうと望む，神のために女神たちは。
糸を紡ぐ［女たちに寄り添う］ように，彼は水たちの中で［女神たちに］広がり寄り添っているのだから。
彼は初めて子を産む［女たち］の初乳を吸う。

6. ここに，馬の誕生がある，そしてこの太陽光の。
欺瞞たちと，傷害たちとまみえることから親方たちを護れ。
生の防御壁たち（堤）の中で，遠くにあって忘れ去り得ない［彼］に，
悪意たちが達しおおせてはならない，虚偽たちが。

7. 自分の家で（その人の）乳牛がよく乳を出す者は，
肥えて自己決定権をもつに至っている。［彼は］よくできた食物を食べる。
かのアパーム・ナパートは，水たちの中で滋養をとりながら，
［彼に多くを］捧げる者にものを与えるため，輝き亘る。

8. 水たちの中で，清らかな神的な［輝き］によって，
天理に従う衰えることのない者として，広く輝き亘っている者，
彼のまさしく枝として，他の［地上の］諸存在は
子孫を作ってゆく，植物たちも子孫たちによって。

9. アパーム・ナパートは，垂直に［立って］，稲光を身に纏い，
斜交い（水平）に［横たわる水たち］の膝（腹）の上に（今まさに）乗った。
彼の最高位の偉大さ（権力）を運びながら，
黄金色の，若［水］たちは巡り進む。

10. 彼は黄金の見かけをし，黄金の全貌をもっている。
アパーム・ナパートは，彼こそは，また，黄金の色をしている，
黄金製の母胎（マタハ: 居住場所）から［立ち現れて］，座を占めた後で。
黄金を与える者たちは，彼に食物を与える。

11. 彼のそのかんばせと，そして，好ましい秘密の名前は，
大きくなる，彼アパーム・ナパートの（それは）。

彼を若い女たちが，共にこうして点火する時，
黄金色のバターオイルが彼の食物である。

「若い女たち」: ここでは火を錐り出す指（女性名詞）。

12. 多くの者たちの中で，最も近しい同僚である彼に
祭式（称讃）たちによって，我々は奉仕したい，敬意によって，供物たちによって。
私は［彼の］背をすっかり拭い，木片たちによって定め置きたい，（また，）
食物たちによって定め置き，讃歌たちによってぐるりと（巡りながら）喜び称える。

13. 彼は，種牛として，それ，胎児を彼女たちの中に作った。
彼は，仔［牛］として彼女たちを吸う。［彼女たちは］彼を舐める。
彼，アパーム・ナパートは褪せることのない色をして，
いわば別の者の肉体によって，ここ（祭場）において，仕事に就いている。

14. この最高の場に立っている，
煙ることのない［焔たち］によって，至る所へ光を放っている彼の周りを，
水たちは，孫［である彼］にバターオイルを食物として運びながら，
自ら，外套たち［を身につけて］，飛び回っている，若［水］たちは。

「煙ることのない」: アヴェスタの光輪（フヴァルナフ）は，煙を出さずに燃えることを意味する*sṵel に遡ると考えられる。

15. 私は，アグニ（火神）よ，人々によい定住を保持した。
私は，また，能力（資産）ある者たちによい讃美を保持した。
神々が援助すること，それは，全て，めでたい（幸ある）ことである。
(リフレイン) 高く，我々は論じたいものだ，分配の場において，良き男児たちを持つ者たちとして（なるべく）。

リグヴェーダ **X 30** (856) アパーム・ナパート Apāṃ Napāt（伝統索引によれば「水たち」）

1. 神々のもとへ，進路（たどる道）は進み行け，霊力あることばへと，
水たちへ向かって，思考の発揮として，
ミトラの，ヴァルゥナの大きな居場所（ﾏﾀﾊ: ハレの場）へと。
幅広い広がりを持つ［進路］へと，よき称讃を（君 ＝ 詩人自身は）
服させよ（たどり行かせよ）。

2. アドゥヴァリュ（祭官職名「祭式の道を辿る者」）たちよ，まさに供物を備えた者となれ。
求めている水たちへ向かって，求めている者たちよ，行け，
赤みがかった鷲（朝の太陽）が見下ろしている［水たちに向かって］。
その波を，今日，よい手をもつ者たちよ，［自らの手に］絡め取れ。

3. アドゥヴァリュたちよ，水たちへと行け，海へ。
水たちの孫を，供物によって［自分たちのために］祭れ（ﾏﾀﾊ: 讃えよ）。
彼（アパーム・ナパート）は君たちに，今日，よく澄んだ波を与えるがよい（ﾏﾀﾊ: 与えることになる）。
彼のために，蜜［酒］を含むソーマを搾れ。

「自分たちのために」はこの儀礼が祭官たちのためになされることを暗示する。「海へ」，「波を」は，今昇り水に映る太陽光を暗示するか。

4. 水たちの中で，燃料を持たずに光を放っているようにと，
［霊感に］うち震える者たちが［祭式の］行程たちにおいて祈る者，
水たちの孫よ，蜜［酒］を含む水たちを［我々に］与えよ，
それらによって，インドラが英雄的行為へと（既に）増長しているところの。

5. 美しい若い女たちを若者が，のように，
それらをソーマが喜び，興奮するところの，
その水たちへ向かって，アドゥヴァリュよ，遙かに行け。

［君が］注ぎ取ることになる時には，植物たちによって［それらを］清めよ。

6. まさにそのように，若い男に若い女たちは身を屈める，
彼が，求めて，求めている［彼女たち］へ向かって行く時には。
［彼らは］理解を一つにする。思考において認識を一つにしている：
アドゥヴァリュたち，ディシャナー（祭りの女神），そして天に属する水たちは。

7. 囲い込まれていた君たちに，広い空間（世界）を作った者，
君たちを，大きな非難から解放した者，
そのインドラのために，蜜［酒］を含む
神々を酔わせる波を，送り出せ（波を立てよ），水たちよ。

8. 彼（インドラ）のために，蜜［酒］を含む波を［君たち水は］送り出せ（波を立てよ），
君たちの胎児である，蜜［酒］の泉である［波を］，スィンドゥ（インダス，河たち）よ，
バターオイルを背に［滴らせ］，［祭式の諸々の］行程において崇められるべき［彼を］。
富める水たちよ，私の呼びかけを聞け。

9. インドラの飲み物である，酔わせるその波を，スィンドゥたちよ，
送り出せ（波を立てよ），［天地］両［界］を動かし進める［波を］，
酔いに突き動かされた（駆られた），Uśāná- から生じた(?)，霧から生まれた，
三本の縦糸からなる［？］を巡り貫き歩む泉［である波］を。

「波」: ここではソーマが重ね合わされている。最終行：ソーマが三界を貫く水脈（地下水脈をも含む）に通じるという観念が背景に隠されているとも考えられる。

10. こちらへ蛇行しながら，しかも今や二つの流れとなって，
牛たちを巡って戦う者たちのように，追い込みへとかかっている，

世界（「生ずるもの」）の生みの母であり，妻である
水たちを，リシよ，慶べ，共に成長し，同じ母胎から［生じた水たち］を。

「追い込みへとかかっている」*niyavám cárantīḥ*:「幅を狭めて拘束する行為を遂行する」と考えた。水の動きが（濾し器の中で）一つに収束することを言うものか，水たちが「（ソーマを）一カ所に追い込むことに携わる」意味であろう。

11. 我々の［祭式の］行程を，神々を称えることを通じて促進せよ。
［我々の］霊力あることばを，財たちの獲得のために促進せよ。
天理の活用に際しては，［君たちの］乳房を解き開け。
我々に従順（聞く耳を持つ者）となれ，水たちよ。

「［我々の］~~ことばの霊力~~を」：祭官たちのための儀礼であることを暗示している。「乳房を解き開け」：衣を解き開いて，乳房を顕せ（乳を与えよ）の意味。

H 霊力あることば

12. 富める水たちよ，［君たちは］良きこと（ﾏﾀﾊ：物）を支配しているから，
そして，幸ある精神力と不死とを保っているから，
そして，子孫（後裔）に富む富の妻たちであるから，
サラスヴァティーは，歌い迎える者に，その若さの力を定め置け。

13. バターオイル，乳たち，蜜酒たちを保ちながら，
水たちがやって来るのが（今まさに）目に留められた時，
［水たちは］アドゥヴァリュたちと思考において同意している（「知識を一つにしている」），
［水たちが］インドラのために良く搾られたソーマを運んでいる時。

14. 生きている［者］たちを価値あるものとしてもつ，この富める［水たち］は（今まさに）やって来た。
アドゥヴァリュたちよ，据えよ，仲間たちよ。
バルヒシュ（敷草）の上に置き定めよ，ソーマに与る者たちよ，

水たちの孫と同意（知識を一つに）しながら，当の者たちを。

15. 水たちは，求めながらやって来た，このバルヒシュ（敷草）へと。
［水たちは］［祭式の］行程において，神々を敬いつつ座った。
アドゥヴァリュたちよ，インドラのためにソーマを搾り出せ。
神々を称えることが，君たちにとって，（今まさに）また，行い易くなった。